

文・皿木喜久

題字・藤渡辰信

紅陵に命燃ゆ

昭和11年、江東の芝浦に農民により造られた重松をたたえる頌徳碑。碑の右側に重松の姿が見える
—草思社『朝鮮で聖者と呼ばれた日本人』から



東洋協会専門学校京城分校

明治40（1907）年東洋協会が支部を設けたの
にとともに、桂太郎校長が韓国総監の伊藤博文

とはかり分校の設置を決定、同年10月1日、開
校した。大正7年、拓殖大学と改称したとき、
分校は東洋協会京城専門学校として独立した。
大正9年には朝鮮総督府、朝鮮銀行、満鉄（南

満州鉄道株式会社）の共同出資による財団法人
私立京城高等商業学校に、さらに11年には官立
となり、朝鮮人学生も入学できるようになっ
た。

農村を豊かに変えた「聖人」

その7 重松嗣修と朝鮮



宣教師の気持ちで海外へ
地図で見ると、江東は平壤から
東北東に40キロばかり離れた所にあ
る。今は北朝鮮の一部になってい
る。だから日本人が訪ねていくす
べもない。
重松嗣修がこの小さな町、とい
うか村の金融組合理事として赴任
したのは大正14（1925）年7
月のことだった。このときから約
13年に及ぶ重松の驚くべき農民へ
の貢献の歴史が始まるのだ。
愛媛県粟井村（現松山市）出身
の重松が松山中学から東洋協会専
門学校の朝鮮語学科に入学したの
は明治も終わりの45年のことだっ
た。同校は台湾協会専門学校が明
治40年に名称変更していた。拓殖

重松嗣修の生涯を描いた田中秀
雄氏の『朝鮮で聖者と呼ばれた
日本人』。表紙の写真が重松
本人だ。
重松が朝鮮に未来をかけていたこ
とは想像に難くない。
今年2月、近現代史家、田中秀
雄氏の『朝鮮で聖者と呼ばれた日本人』が草思社
から出版された。重松の
朝鮮での活動をつぶさに
描いた力作である。それ
によれば、重松は後に東
洋協会専門学校時代の校
長、桂太郎の訓辞を回想
している。「みんな宣教
師のような気持ちで海外
に出ていくように」とい
う内容だった。
大正2年の夏休みには朝鮮旅行
を行い、さらに翌3年には朝鮮語
科の40人全員が1年間、京城分校
で学ぶなど、朝鮮への傾斜をいっ
そう強めていく。
そして大正4年に同分校を卒業
すると、朝鮮総督府の官吏として

雄氏の『朝鮮で聖者と呼ばれた日本人』が草思社
から出版された。重松の
朝鮮での活動をつぶさに
描いた力作である。それ
によれば、重松は後に東
洋協会専門学校時代の校
長、桂太郎の訓辞を回想
している。「みんな宣教
師のような気持ちで海外
に出ていくように」とい
う内容だった。
大正2年の夏休みには朝鮮旅行
を行い、さらに翌3年には朝鮮語
科の40人全員が1年間、京城分校
で学ぶなど、朝鮮への傾斜をいっ
そう強めていく。
そして大正4年に同分校を卒業
すると、朝鮮総督府の官吏として



済州島などに勤務、2年後には退
官して朝鮮金融組合に入る。
この朝鮮金融組合については説
明が必要だ。
日韓併合前の明治37年から、第
1次日韓協約に基づき、韓国の財
務顧問を務めた日本人に目賀田種
太郎がいた。米国のハーバード大

学を卒業、日本では大蔵省主税局
長などをつとめたテクノクラート
だった。
振興の切り札、金融組合
目賀田は韓国経済を立て直すた
め、正確な国家予算の計画実行や
貨幣の整備、さらに塩田開発など

を勧め、農村の振興のために設置
したのが金融組合である。
それまであった「契」という日
本の頼母子講のような組織をもと
に、お互いの信用により金を融資
し合う。そのことで農村に活気を
与えようというものだった。
明治40年、各地区に30の組合が
でき、随時増やされていった。当
初の資金として政府が各組合に当
時の金で1万円を融資した。それ
ぞれの組合に日本人の理事一人が
配置される仕組みだった。
驚くことに、最初の30人の理事
は目賀田の意向で全員が東洋協会
専門学校卒業生だった。当時の
理事は1万円を胸巻きに入れ、馬
の背に揺られながら現地に向かっ
たのだという。
この中には後に組合の中央組織
である金融組合聯合会の幹部とし
て、「世界のヤマネ」と言われた
山根謙もいた。重松もこうした
「先輩」たちの活躍に刺激されて
金融組合入りしたのだ。
最初の任地は平安南道の陽徳だ
った。江東からさらに60キロばかり
東の山間部の町である。着任は大
正7年の正月だったが、その1年
余り後の8年3月、いわゆる「万
歳騒擾事件」に遭遇する。
3月1日、京城で起きた独立要
求運動が付和雷同の民衆も巻き込
み、朝鮮全土に広がりを見せた。
それが陽徳にも及び暴徒の銃弾を
右足に受け、重傷を負った。
このため、いったんは平壤の平
安南道金融組合聯合会に勤務する
が、6年後再び江東の理事として
「現場」に復帰する。

重松嗣修（しげまつ・まさな
お）
明治24（1891）年4月、現在
の愛媛県松山市生まれ。大正4
年、東洋協会専門学校京城分校
卒業。6年、新義州地方金融組
合見習理事、同年12月、陽徳地
方金融組合理事、10年、平壤の
平安南道組合聯合会勤務、14
年、江東地方金融組合理事に赴
任した。昭和13年、金融組合聯
合会本部教育部教務課長、その
後、京畿道支部長、聯合会教育
部長、国民総力朝鮮聯盟実践部
長などを務めた。21年1月帰国
後、故郷で酪農などを営み50年
3月死去。享年83。著書に『朝
鮮農村物語』など。

成功した「卵から牛へ」
江東で初めにやったのが副業と
しての養鶏の奨励だった。村落ご
とに鶏を育て、産んだ卵を共同で
出荷、代金は金融組合に預金させ

もっとも泉下の重松にとって北
朝鮮の陽徳や江東の人々の暮らし
の方が気がかりかもしれない。
（毎週土曜日掲載）

この中には後に組合の中央組織
である金融組合聯合会の幹部とし
て、「世界のヤマネ」と言われた
山根謙もいた。重松もこうした
「先輩」たちの活躍に刺激されて
金融組合入りしたのだ。
最初の任地は平安南道の陽徳だ
った。江東からさらに60キロばかり
東の山間部の町である。着任は大
正7年の正月だったが、その1年
余り後の8年3月、いわゆる「万
歳騒擾事件」に遭遇する。
3月1日、京城で起きた独立要
求運動が付和雷同の民衆も巻き込
み、朝鮮全土に広がりを見せた。
それが陽徳にも及び暴徒の銃弾を
右足に受け、重傷を負った。
このため、いったんは平壤の平
安南道金融組合聯合会に勤務する
が、6年後再び江東の理事として
「現場」に復帰する。

たまった金で農耕用の牛や食用の
豚を買えば、農家の生産性は一気
にあがる。重松が後に「卵から牛
へ」と名付けた運動である。
こういったも成功させるには、農
家が足並みを合わせ、同じ鶏を飼
い、卵質をそろえるなどの必要が
あった。重松はまず自ら有精卵を
買って込んで育て、生まれたヒナが
育って生んだ有精卵を希望する農
民に無償で与える方法をとった。
さらに自ら軍の駐屯地などを訪問
し「販路」を広げていった。
「理事さん」の率先垂範ぶりには
はじめ日本人の言っことなど聞
けるか」と抵抗していた農民たち
も、若い人を中心に受け入れるよ
うになる。牛を養える農家が続出
してきた。12年間で卵貯金により
購入した牛は約1000頭、豚は
2500頭以上だった。ためた金で
上級の学校に行き、医者になった
若者もいた。こちらは「卵から医
者」だった。
車が通れる道がなくて生産が停
滞している地区では、早朝、農作
業の前にみんなで工事するよう呼
びかけ、立派な道路を造った。重
松が工事を始めるとき、ホラ貝を
吹いて合図としたため「ホラ貝道
路」と呼ばれた。
こうして成功は金融組合のモデ
ルとされ、重松はあちこちでの講
演に引っぱり出された。各地で似
たような取り組みが行われた。
江東を去る2年ほど前の昭和11
年春には、芝里という地区に重松
の頌徳碑まで建てられた。
終戦直後の20年10月には「朝鮮
人を戦争に駆り立てた」として朝
鮮の警察に逮捕された。ところが
取り調べに当たった検事は何と重
松の卵貯金で学校に通うことがで
きた江東の少年だった。そのため
無事に帰国できた。文字通り「聖
者」扱いだっただ。
今年の日韓併合100年とあつ
て、日韓挙げて戦前の日本の朝鮮
での「罪」をあけつらっている。
かつて、「日本は韓国に良いこと
もした」と「事実」を述べただけ
でクビになった大臣もいた。
だがこの重松の功績ひとつ見ただ
けでも、「良いこと」どころで
はない。当時の日本と朝鮮は上っ
面の見方ではとても理解できない
ことがわかる。

を勧め、農村の振興のために設置
したのが金融組合である。
それまであった「契」という日
本の頼母子講のような組織をもと
に、お互いの信用により金を融資
し合う。そのことで農村に活気を
与えようというものだった。
明治40年、各地区に30の組合が
でき、随時増やされていった。当
初の資金として政府が各組合に当
時の金で1万円を融資した。それ
ぞれの組合に日本人の理事一人が
配置される仕組みだった。
驚くことに、最初の30人の理事
は目賀田の意向で全員が東洋協会
専門学校卒業生だった。当時の
理事は1万円を胸巻きに入れ、馬
の背に揺られながら現地に向かっ
たのだという。
この中には後に組合の中央組織
である金融組合聯合会の幹部とし
て、「世界のヤマネ」と言われた
山根謙もいた。重松もこうした
「先輩」たちの活躍に刺激されて
金融組合入りしたのだ。
最初の任地は平安南道の陽徳だ
った。江東からさらに60キロばかり
東の山間部の町である。着任は大
正7年の正月だったが、その1年
余り後の8年3月、いわゆる「万
歳騒擾事件」に遭遇する。
3月1日、京城で起きた独立要
求運動が付和雷同の民衆も巻き込
み、朝鮮全土に広がりを見せた。
それが陽徳にも及び暴徒の銃弾を
右足に受け、重傷を負った。
このため、いったんは平壤の平
安南道金融組合聯合会に勤務する
が、6年後再び江東の理事として
「現場」に復帰する。

成功した「卵から牛へ」
江東で初めにやったのが副業と
しての養鶏の奨励だった。村落ご
とに鶏を育て、産んだ卵を共同で
出荷、代金は金融組合に預金させ